

日本のリーダー育成を通じて

21世紀のリーダー育成を目指し、私財を投じて松下政経塾を設立

「21世紀は、日本をはじめとするアジアに世界の繁栄はめぐってくる」と洞察した創業者は、その繁栄の受け皿づくりを熱心に提唱、その準備のための様々な活動を開始した。そして、1978年（昭和53）9月、21世紀に理想の日本を実現しうる為政者をはじめ、各界の指導者を育成するために、神奈川県茅ヶ崎市に私財70億円を投じて「松下政経塾」を設立することを発表した。その後、文部省より財団法人の認可も下り、1979年6月より第一期生を募集、これに対して、全国より約900人が応募し、その中から3次にわたる審査の末に23人が入塾、1980年4月に開塾した。



1980年（昭和55）に開塾した
松下政経塾

創業者は、1946年にPHP研究所を設立以来、「**社会がよくならなければ人々の幸せもありえない**」と考え、政治や社会に対してさまざまな提言を行なってきた。しかし、活動を進める中で、新しい日本の将来を描き出していくには、それを担う若い有為の指導者、とりわけ政治の分野における指導者が必要だという思いを強めていった。そして、1965年の秋、その思いを一つの“塾”として構想したのである。PHP研究・活動の中で培われた危機感、憂国の情から発したものであった。創業者は、これを趣意書としてまとめ、親しい有識者の人たちに意見を求めたが、実業家が政治の世界に手を広げることを反対する人は多く、実現には至らなかった。

しかし、創業者の“塾”にかける思いは冷めることはなく、1973年のオイルショックを機に、混迷の度を増していく日本の姿に、憂国の情はますます募り、今度は意を決して設立に踏み切ったのであった。この時には、かつて反対した人々も「大いにやってほしい」と激励するようになっていた。

現在、塾出身者は、政治、経済、研究・教育、マスコミ等幅広い分野で活躍しており、そのうち37名が国会議員を務めている（2014年4月1日現在）。

基本理念づくりへのこだわり

創業者は、「**基本理念をどうつくるかによって、塾の将来が決定づけられる**」との強い思いを持っていた。

塾設立の記者発表後、さっそく毎週土曜日、創業者を筆頭に5人のメンバーが出勤して、基本理念の検討を繰り返した。メンバーが考えた多くの案を模造紙に大書して会議室の壁にズラリと貼り、創業者に見せるのだが、何回やってもOKがでない。会議は毎週、午前9時から午後3時頃までかかった。創業者の時間を超越した真剣な検討、奥深い考察、その上での的確な指示に、メンバーは改めて驚嘆した。

メンバーは、創業者の思いがきっちりと入っていないためにOKがでないのかと思い、著書を読み直して勉強会を続けた。そして、ようやく創業者が納得する理念ができたのは、一年が過ぎようとしていた頃で、その間、理念検討会は計 50 回にも及んでいた。

こうしてできたのが、「塾是」「塾訓」「五誓」で、それぞれ松下政経塾の基本理念と、そこに集う人の基本の心構え、そして日常の行動指針を明示している。

初代塾頭の久門泰氏は、こう語っている。「開塾後、塾生と意見が食い違い、このやり方・進め方でいいのかと迷ったこともありましたが、方向を過たず前へ進めることができたのは、しっかり根を張った大木のような揺るぎない理念があったからです」

命をかけた開塾式

1980 年（昭和 55）4 月 1 日、松下政経塾は開塾式を迎えた。創業者は、塾長として式辞を述べる予定になっていたが、前日、風邪で発熱し、開塾式への出席は難しいかもしれない、ということであった。しかし、創業者は、風邪をおして出席、顔色もすぐれず、声を出すのも辛そうだったのにもかかわらず、予定通り自ら式辞を述べ、塾生たちを激励した。そして、式終了後の記者会見も無事務めて、塾長室に戻ってきた。

久門塾頭が思わず、「本当にお疲れ様でした。お体は大丈夫ですか」と尋ねると、創業者から返ってきた言葉は、次のようなものだった。

「本当はね、僕もあかんと思ってた。しかしね、もし開塾式で倒れたとしても、僕は本望やと思たんや」。のちに塾生にも、「あのときはこれで死んでもええわい。今日だけは行こうという思いで出席した」と語っている。

この言葉を聞いて、久門塾頭は、鳥肌が立つ思いだったという。「当時 85 歳の創業者の、その執念に驚き、思わず涙があふれました。“経営の神様”とまで言われ、功なり名を遂げた人が、なぜここまでの覚悟をもって、この松下政経塾の事業を起さなければならなかったのか。この人は、日本の次代をになう指導者を育てる、この大事業に、命がけ臨んでいるのだ、ということ、改めて思い知らされたのです」



1980 年（昭和 55）開塾式にて祝辞を述べる

創業者は塾生に何を伝えようとしたのか

創業者（松下政経塾では塾主と呼ぶ）が塾生に講話した時間は、91 時間 24 分。その記録からよく話したキーワードの回数を数えると次のようになる。

第 1 位	「素直」	114 回
第 2 位	「国家百年の計」	61 回
第 3 位	「秀吉」	55 回

第4位	「武蔵」	51回
第5位	「自修自得」	43回
第6位	「松陰」	36回
第7位	「釈迦」	33回

(松下政経塾・政経研究所調べ)

圧倒的な数で第一位になったのが「素直」である。創業者の言う「素直」とは、「**素直な心を持てば融通無碍や。融通無碍は神様に通ずる**」つまり、与えられた条件や環境を良い悪いではなく、すべてを受け入れるという意味あいである。

創業者は、塾でこの「素直」の話をする時、第3位に入った「豊臣秀吉」をよく例えに使った。歴史上の人物で一番素直な人は、秀吉だというのである。草履取り、下足番、馬のお世話係など、講談本で読んだ秀吉のエピソードを話しながら、素直で熱心なことが生きていく上で一番必要であると説いた。

創業者が、「**塾生には国是を創ってほしい**」と語る時のキーワードは、第2位になった「国家百年の計」である。これをさらに具体的に説明し、二大国是として挙げたのが「無税国家」と「新国土創成」であった。

こうした国家百年の大計を創っている先駆者がいない、師匠がいない、ということから使ったのが、第4位の「武蔵」であった。「**宮本武蔵に先生はいなかった。しかし剣聖と言われるまでになった**」だから塾生には、第5位の「自修自得」で国是を創ってほしいと語っていたのである。

松下政経塾の第12期生で、同塾・政経研究所の金子一也所長は言う。「塾主は、塾生に対し、『**素直な心で衆知を集めてほしい**』『**国是を創り発表してほしい**』と繰り返し話されました。松下政経塾は何をするところなのか、なぜ創られたのかは、設立趣意書にある通り、『**国是を創り、同時にそれを実践する人を育てる**』に尽きます。主は、国是を創る研究と、それを実践できる人物になる研修の両輪を塾生に求めているのです」



1982年(昭和57)
塾生のインタビューに答える創業者

究極の目的は全人類の幸せにある

1980年(昭和55)8月、創業者85歳の時の塾生への講話である。

「この政経塾の真のねらいというものはどこにあるのかということについて、今日は話をしてみたい。政経塾の規模はこのように小さいものやけど、そのねらいは日本の将来というもの、あるいはもっと広く言えば、世界の全人類のために何をなすべきかというところまで我々は考えに入れて、塾の活動をやらなければいかん。

諸君が塾生としてここで勉強するという事は、諸君個人の将来のために、一つの使命を持って仕事をする事も大事やけども、あわせて塾全体の目標というものは、日本をいろいろな意味において進歩発展させると同時に、日本だけでなく全人類に及ぼすのや。そういう目標をこの塾は持っているということを考えてもらいたい。だから、一つは諸君自身のために、一つは日本の将来のために、一つは全人類のために、この塾は活動を続けていく、それがこの政経塾の目標であると、このように考えてもらいたい。(中略)

一人の立派な人を創るということも非常に大事な尊い仕事や。それだけでもこの塾を開いた意義がある。しかし、同時に共同の目標を持って、協同一致して日本の将来というもの、我々の次代の人々を良くしていこうというところに、我々の使命感がある。その使命感があるためにこの塾を開いたんだと、諸君もそれに馳せ参じたんだと、こういう解釈をはっきりと持ってもらいたい。それがなかったら、ここに優秀な人ができてても事が知れてるわな。(中略)

現在の世界を見ても、40億の人がおる。その4分の1、10億人というものは、飢餓に瀕するという最低の生活をしているわけや。これは、千年前はもっとひどかった。2千年前はもっとひどかった。けれど、千年なり2千年経っているうちにだんだん進んできて、現代は4分の3の人口はやや文明的な生活というか活動をやっているわけや。

これを全人類に文明的な生活をやらしてもらわなければいかん。あとの10億人を文化人たらしめるには、大変な仕事をしなければならん。できやすいところはもう皆済んでいる。けれども、これから残ったところは非常に時間がかかる。容易にはできない。それをやらないといかん」



1982年(昭和57) 松下政経塾で塾生たちと懇談